

富田林市埋蔵文化財調査報告8

中野遺跡発掘調査概要IV

1983

富田林市教育委員会

正誤表

訂正箇所	誤	正
P. 1 L. 3	河内平野	南河内平野
P. 3 表1 調査区3	若松町5丁目	若松町4丁目
P. 3 表1 調査区10	若松町5丁目	若松町4丁目
P. 4 L. 23	古墳時代前期が	古墳時代前期の
P. 6 L. 13	疎	疎
P. 8 L. 12	回転など	回転など
P. 8 L. 15	回転など	回転など
P. 9 挿図5	3. 濁灰褐色砂礫土	3. 濁灰褐色砂礫土
P. 14 L. 13	拳	拳
P. 14 L. 14	疎	疎
P. 16 L. 12	挿図11-17	挿図12-17
P. 16 L. 23	挿図10-1	挿図11-1
P. 16 L. 27	挿図11-1~8	挿図12-1~8
P. 18 L. 1	挿図11-18	挿図12-18
P. 18 L. 7	挿図11-9~11	挿図12-9~11
P. 19 L. 4	鋸歯状	鋸歯状
P. 19 L. 5	挿図11-20	挿図12-20
P. 19 L. 11	挿図11-12, 13	挿図12-12, 13
P. 19 L. 22	挿図10-2	挿図11-2
P. 19 L. 23	磨滅	磨滅
P. 19 L. 24	挿図11-19	挿図12-19
P. 20 L. 7	挿図11-14	挿図12-14
P. 20 L. 10	挿図12	挿図13
P. 20 L. 10	直口	直径
P. 20 L. 14	挿図11-15	挿図12-15
P. 20 L. 19	挿図11-16	挿図12-16

はじめに

富田林市は大阪府の東南部に位置し、金剛生駒山地、和泉山地などから派出してきた丘陵地帯にかこまれ、この間をぬうように、市内のほぼ中央を石川が北流しています。この石川両岸の河岸段丘上には数多くの遺跡が分布しております。

中野遺跡もこうした立地にあり、市街化区域と重なることもあるって年々住宅建設が増加し、これに先立つて発掘調査を実施してまいりました。これまでの調査の結果、中野遺跡は、弥生時代中期から中世まで断続的に続いた集落址であることが確認され、とくに弥生時代に関する貴重な遺構・遺物が多く出土しています。

今回の調査地は、遺跡の北限と推定される個所にあたり、調査の結果、集落の範囲を知る上で有益な手がかりを提供してくれたと言えます。

最後に、調査にあたつてご指導ご協力を賜わりました方々に厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月

富田林市教育委員会

教育長 福田治平

例　　言

1. 本書は富田林市教育委員会が昭和57年度に国庫及び府費の補助を受け、発掘調査を実施した大阪府富田林市所在の中野遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課中辻宣を担当者とし、昭和57年12月1日に着手し、昭和58年3月31日に終了した。
3. 収録した遺構平面図の北は真北を示す。尚、真北は磁北に対して7度3分東にふれています。(1972年8月測定値)
4. 調査を実施するにあたり、下記の諸氏から格別の助言や援助を受けた。記して感謝の意を表します。
北野耕平(神戸商船大学教授・富田林市文化財調査会委員)・今村道雄・玉井功・山本彰・小林義孝(以上、大阪府教育委員会)・竹谷俊夫(天理参考館)
5. 本書の執筆は、忍薰・岡本武司・中辻宣が行ない、文末にそれぞれ明らかにした。
6. 本書の編集は中辻が行なった。また、製図については、遺物を忍薰が、遺構を白江和弘と岡本武司が行なった。

調査参加者

忍　薰　白江和弘　高橋修美　岡本武司
大石　聰　木村泰雄　村井正幸　杉山泰敏
本並俊哉　本並宏介　浅野隆志　田川友美
奥田正己　山田道司　岡嶋智美　仲井和代

本文目次

	頁
I 調査に至る経過	1
II 周辺の遺跡と既往の調査	4
III 調査の成果	6
1. 82-I 区	6
2. 82-II 区	9
3. 82-III 区	11
IV まとめ	20

挿図目次

挿図 1 中野遺跡周辺地形図	1
挿図 2 中野遺跡発掘調査地点地域図	2
挿図 3 遺構平面図・断面図 (82-I 区)	7
挿図 4 包含層出土遺物 (82-I 区)	8
挿図 5 遺構平面図・断面図 (82-II 区)	9
挿図 6 ピット出土遺物 (82-II 区)	10
挿図 7 北壁・西壁断面図 (82-III 区)	11
挿図 8 遺構平面図 (82-III 区)	13
挿図 9 土壙 1 平面図・断面図 (82-III 区)	14
挿図 10 溝 6・溝 8 断面図 (82-III 区)	15
挿図 11 溝 6・土壙 1 出土遺物 (82-III 区)	17
挿図 12 溝 2・溝 6・溝 7・溝 8・土壙 1 包含層出土遺物 (82-III 区)	18
挿図 13 銅管	20

表 目 次

表1 中野遺跡における調査一覧表.....	頁 3
表2 ピット一覧表.....	14

図 版 目 次

図版1 82-I区(上) 調査区近景 南より	
(下) 遺構全景 東より	
図版2 82-I区(上) 暗渠瓦出土状況 北西より	
(下) 同 上 東より	
図版3 82-I区(上) 暗渠細部 北東より	
(下) 第4層出土遺物	
図版4 82-II区(上) 調査区近景 南西より	
(下) 遺構全景 西より	
図版5 82-III区(上) 調査区近景 西より	
(下) 遺構全景(第1面) 北より	
図版6 82-III区(上) 土壙1遺物出土状況 北より	
(下) 第3層銅管出土状況 西より	
図版7 82-III区(上) 溝6上面石鎌出土状況 南より	
(下) 溝8上面石鎌出土状況 西より	
図版8 82-III区(上) 遺構全景(第2面) 北より	
(下) 溝6遺物出土状況 南より	
図版9 82-III区(上) 遺構全景(第3面) 北より	
(下) 溝7石斧出土状況 西より	
図版10 82-III区 石器(石鎌・石錐・不定形石器・扁平片刃石斧)・銅管・弥生土器	

I 調査に至る経過

富田林市は大阪府の南東部にあって、生駒・金剛山系の山麓丘陵地と羽曳野丘陵の一角を占め、河内平野南部の中心都市として発展しつつある。また、大阪都心部から25km圏内にあるため、大阪都市圏のベットタウンとして近年著しい人口増加をみている。

こうした中で、中野遺跡は市街化区域にあって、年々宅地化の傾向が進み、開発に先立って富田林市教育委員会が中心となって発掘調査を実施してきた。

今回、富田林市中野町1丁目459-1、同468-1、3、4および中野町2丁目498番地先において個人住宅建設の届出があり、これを受けて発掘調査を実施するに至った。 (中辻)

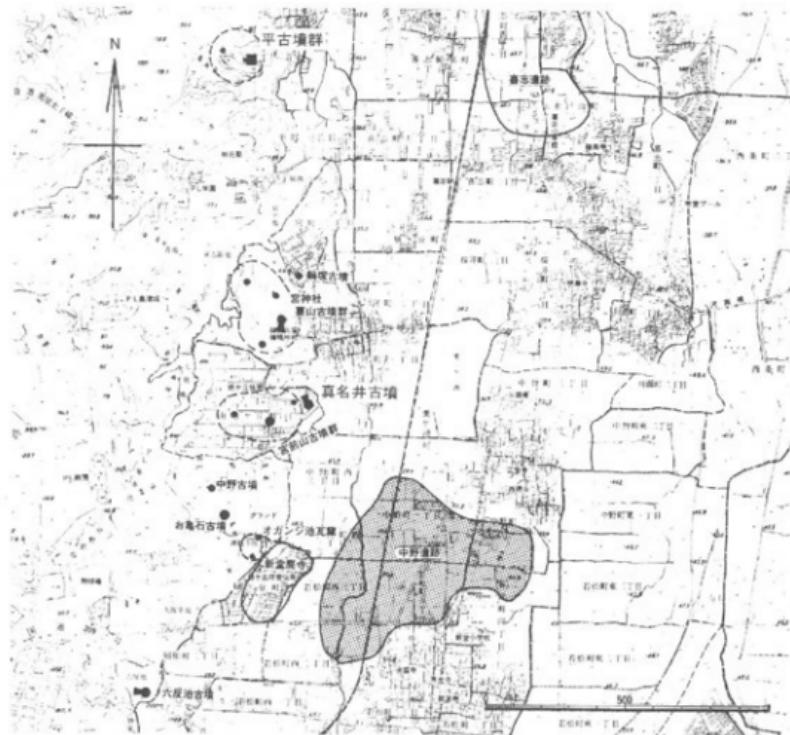


図1 中野遺跡周辺地形図



挿図2 中野遺跡発掘調査地点地域図

調査区	場 所	調査理由	主 な 遺 物・遺 構	偏 考
1	中野町2丁目	温室建設	弥生土器・石器・土師器・須恵器・V字溝	市教委 1970年 大谷女子大 1978年
2	若松町5丁目	住宅建設	弥生土器・石器・サヌカイト剝片・土師器・須恵器・住居跡・掘立柱建物・溝・土壤・井戸等	市教委 1979年
3	若松町5丁目	"	弥生土器・石器・石帶・土師器・須恵器・瓦・瓦器等・溝・土壤・井戸	市教委 1979年
4	若松町5丁目	"	縄文土器・石器・弥生土器・紡錘車・溝・土壤	府教委 1980年
5	若松町5丁目	倉庫建設	弥生土器・石器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・溝・土壤・カマド状遺構	市教委 1980年
6	若松町5丁目	住宅建設	旧石器・弥生土器・石器・土師器・須恵器・瓦等・弥生土器群・大溝・掘立柱建物・土壤	市教委 1981年
7	若松町5丁目	"	土師器・須恵器・瓦・サヌカイト 大溝・掘立柱建物	市教委 1982年
8	若松町5丁目	"	弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器 瓦・甕棺・池状遺構・溝・掘立柱建物	市教委 1982年
9	若松町5丁目	"	弥生土器・サヌカイト剝片・石器・土師器・須 恵器・竪穴住居跡・溝・壺棺	市教委 1982年
10	若松町5丁目	"	弥生土器・石器・紡錘車・土師器・須恵器・瓦 器等・大溝・土壤・掘立柱建物	市教委 1982年
11	中野町1丁目	歩道設置	弥生土器・石器・土師器・須恵器・埴輪・瓦・ 新草古墳・溝・暗渠	府教委 1982年
12	中野町2丁目	住宅建設	弥生土器・石器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁 器・大溝・土壤・掘立柱建物	市教委 1983年
13	中野町1丁目	"	弥生土器・土師器・須恵器・瓦・瓦器・ サヌカイト・暗渠	市教委 82-Ⅰ区
14	中野町2丁目	"	弥生土器・土師器・瓦器・サヌカイト ビット	市教委 82-Ⅱ区
15	中野町1丁目	"	弥生土器・石器・土師器・須恵器・瓦・瓦器・ 陶磁器・溝・土壤	市教委 82-Ⅲ区

表1 中野遺跡における発掘調査一覧表

II 周辺の遺跡と既往の調査

中野遺跡は金剛山系前衛丘陵地の一部である東部山地と羽曳野丘陵の一角を占める西部丘陵地を東西に分かつ地溝内を北流する石川の西岸にある。

中野遺跡が立地する河岸段丘一帯は石川の中流域にあたり、断続的ではあるが縄文時代、弥生時代、古墳時代から歴史時代にいたる集落遺跡が数多く分布している。縄文時代前期の錦織遺跡^(注1)は標高75mの石川の河床と約10mの比高差しか持たない段丘上にあって、北白川下層Ⅱ・Ⅲ式と大歳山式の形式を有する土器が出土している。錦織遺跡から距離を近くして錦織南遺跡^(注2)がある。過去の分布調査や発掘調査によって弥生時代から中世にいたる複合遺跡としてとらえられていたが、1981年にはじめて大阪府教育委員会によって大規模な発掘調査が実施され、石川まで直線距離にして約200mの調査区で、縄文時代晩期の河道が検出された。河道からは模大なる量の縄文土器が出土し、なかでも東北地方の土器形式である大洞系の土器が認められ、同遺跡の位置付けを大きく変えるものであった。弥生時代中期になると、市内の最北端に喜志遺跡^(注3)が出現する。この遺跡は標高約48mの石川西岸の段丘上にあって、市内で最も早く学界に知られた。サヌカイト製の打製石器と石屑が豊富に出土することがこの遺跡の特色で、東方約5kmにある二上山一帯にサヌカイト原石が大量に産することと深い関係があると考えられる。こうした特色は、喜志遺跡の南方約2kmにある中野遺跡においてもみられる。市内のはば中央部標高66mの石川西岸には甲田南遺跡がある。1978年12月から1979年3月にかけて、国道309号線建設に伴う大阪府教育委員会の試掘調査で新たに発見された遺跡である。1981年の本調査では弥生時代中期の竪穴住居址が30棟検出され、同時期の一大集落として位置付けられた。弥生時代後期になると、市内南部の高地に遺跡が認められる。石川を西方に見おろす標高約100mから150mの丘陵上には彼方・滻谷遺跡がある。

石川両岸の河岸段丘上に多くの集落遺跡が位置するのに対して、古墳は段丘に臨む丘陵の突端に立地している。中野遺跡西方の羽曳野丘陵には、現在その姿をとどめていないが、真名井古墳^(注5)・鍋塚古墳^(注6)をはじめ、市内唯一現存する古墳時代前期が古墳である廿山古墳が営まれる。中期古墳では、甲田南遺跡周辺の平地に新家古墳・川西古墳が認められる。古墳時代後期になるとふたたび石川を眼下に見おろす丘陵上に古墳が偏在する。嶽山の西斜面には、円墳が23基群在する嶽山古墳群と5基の円墳からなる田中古墳群がある。

歴史時代にいたっては、中野遺跡西方に飛鳥時代の寺院址である新堂庵寺がある。同庵寺のすぐ西には、その名から寺名を推測させる「オガシ」池があり、百濟の仏教文化の伝来を裏付けるものである。こうした寺院は有力な豪族の氏寺として建てられ、終末期古墳の被葬者は

このような豪族であったと考えられる。新堂庵寺を東に見おろす丘陵突端には、新堂庵寺創建時の瓦と同質の平瓦を横口式家形石棺の周囲に壁状に積み上げたお龜石古墳がある。^(注8)

以上のように、中野遺跡周辺には数多くの遺跡が分布することがわかる。

さて、中野遺跡は19世紀末に市内で最も早く発見されながら、1970年の富田林市教育委員会が調査を行なうまでの間、人々から忘れられた存在であった。1970年の発掘調査をかわきりに現在まで20ヶ所をこえる発掘調査が実施されている。その主要な調査については、3頁の「中野遺跡における発掘調査一覧表」に記した通りである。

中野遺跡における初めての調査では、弥生時代中期の土器、石器等を伴うV字溝を確認し、遺跡の性格を再認識させるものであった。その後1979年には遺跡の南部において大規模な宅地造成が計画され、^(注9)発掘調査を実施した結果、弥生時代中期の集落遺構を検出し、遺跡の範囲が^(注10)拡大することが判明した。その後、1980年に国道170号線西側において調査を実施した結果、遺跡の西半部では古墳時代後期の遺構の存在が明らかとなり、遺跡の性格がしだいに解明されることとなった。1982年12月から1983年2月にかけて実施した調査は、従来考えられていた遺跡の北限に当り、結果として、弥生時代中期の土器、サヌカイト製石器、剝片を大量に伴った大溝を検出した。この大溝が集落を区画する性格を持つと考えるならば、弥生集落の北東限が明らかになったことになり、今後の発掘調査においては、集落の範囲を確認することが課題となる。

(中辻)

注1 北野耕平「考古学より見た富田林」(『富田林市誌』、1955年)

注2 富田林市教育委員会『富田林市の埋蔵文化財』(1978年)

注3 山本彰『船橋南遺跡』大阪府教育委員会(1981年)

注4 梅原未治・島田貞彦「河内国南高安及び高志石器時代遺跡」(『京都帝国大学考古学研究報告』第2冊、1917年)

注5 蕨直幹・井上薰・北野耕平「河内における古墳の調査」(『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第1冊、1964年)

注6 丹羅徹『鍋塚古墳発掘調査概要』大阪府教育委員会(1966年)

注7 大阪府教育委員会『河内新堂・鳥含古跡の調査』(1961年)

注8 白石太一郎「畿内における古墳の終末」(『国立歴史民族博物館研究報告』第1集、1982年)

注9 中村浩『中野遺跡発掘調査報告書』富田林市教育委員会(1979年)

注10 富田林市教育委員会『中野遺跡発掘調査概要Ⅱ』(1981年)

III 調査の成果

1. 82—I区

東西約2m、南北約3mの調査区である。検出した遺構は暗渠のみである。

(1) 層序

耕土(第1層)および床土(第2層)の厚さは約30cmある。床土下には灰褐色粘質土(第3層)が厚さ約20cm、さらに灰褐色砂(第4層)が約5~10cm堆積する。灰褐色砂(第4層)下の地山は黄色粘土ではほぼ平坦である。

(2) 遺構

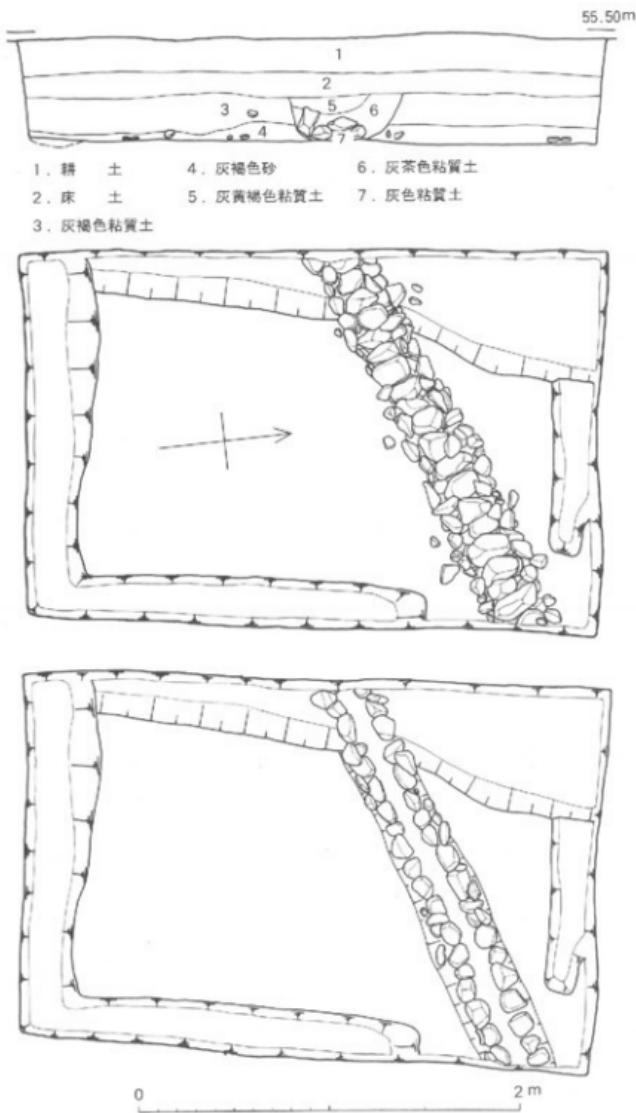
暗渠

北約20度東方向の暗渠で、地形からみて東に流れると思われる。長さ2.2m分を検出した。水田床土下に認められ、第3層(灰褐色粘質土)および第4層(灰褐色砂)を掘り込んで作られている。断面はU字形をしており、幅60cm、深さ24cmを測る。掘り込みの底部に幅10cmほどの間隔をあけて、両側に6~10cmの円礫を丁寧に並べ、その上に13~28cmの比較的扁平な礫で蓋をしている。これらの礫に混じって瓦が2点出土している。暗渠の埋土をみると、石組み内には灰色粘質土が認められ、石組みを灰茶色粘質土が覆っている。その上には灰褐色粘質土が堆積する。この暗渠の続きは、国道170号線歩道設置に伴う1981年9月から12月に実施された大阪府教育委員会の調査でも検出されている。^(注1) この付近は、周辺の水田に比べて底くなってしまっており、調査中においても湧水がはげしかったことからも、水田に伴う排水施設の必要性がうかがえる。^(注2) このような排水施設は、1979年7月に実施した富田林市教育委員会の調査でも確認されている。

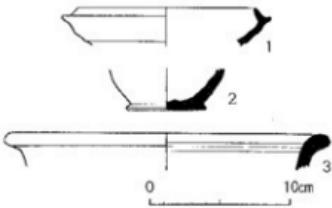
(中辻)

注1 玉井功『中野遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会(1982年)

注2 中村浩『中野遺跡発掘調査報告書』富田林市教育委員会(1979年)



挿図3 遺構平面図・断面図



(3) 出土遺物

遺物は暗渠、第4層(灰褐色砂)、床土から出土している。

暗渠

丸瓦と平瓦が各1点づつ出土している。ともに凸面がナデ、凹面に布目が施されている。

第4層(挿図4—1・2)

土師器5点、須恵器3点、サヌカイトの剝片2点が出土している。土師器は細片のため器種は不明である。須恵器には杯、壺、甕体部片がある。

杯(1) 口径12.6cm、受部径15.0cm、たちあがり高0.7cm、残存器高2.7cmをはかる。全体に浅く扁平で、たちあがりは短くなり、内傾している。口縁端部は尖り気味である。受部はやや上向きにのびる。調整は底部外面に回転へら削りを、他は回転などが施されている。焼成は良好で堅緻。色調は灰青色。

壺(2) 小型の壺で、体部下半から底部にかけて残存している。底径5.6cm、残存器高2.95cmをはかる。底部は平底で、張り出す。底部は回転糸切り、他は回転などが施されている。焼成は良好で堅緻。色調は青灰色。

甕体部は細片で、外面に平行叩き、内面に同心円の型文が認められる。

第2層(挿図4—3)

弥生土器1点、土師器1点、須恵器4点、瓦器6点、磁器1点、瓦3点、サヌカイトの剝片3点、サヌカイトの右核1点が出土している。須恵器を除いて、他の容器類は細片のため器種は不明である。弥生土器の胎土は生駒西麓産である。

須恵器は甕の口縁部、体部片が各1点づつある。他は器種不明。

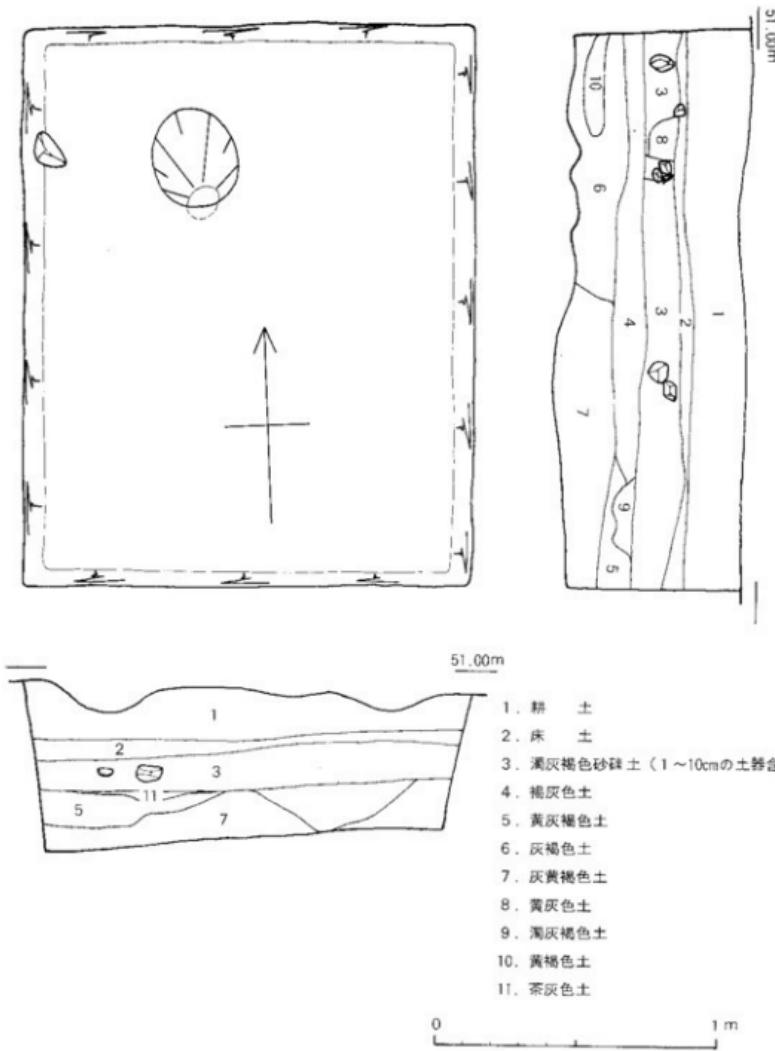
甕(3) 口径22.4cm、残存器高2.6cmをはかる。なだらかに外反する口縁部は開く。口縁端部は丸くおさまる。口縁部内面には一条の弦線がめぐる。調整は内外面ともに回転なし。焼成は良好で堅緻。色調は外面が黒灰色、内面が灰青色を呈する。

甕の体部片は外面が格子目叩き、内面に同心円の型文が認められる。

瓦の2点には凸面に繩目叩き、凹面に布目が認められる。他1点は両面ともになでが認められる。

(忍)

2. 82-II区



挿図5 遺構平面図・断面図

東西約1.5m、南北約2mの小規模な調査区である。標高約51mの石川西岸にあって、石川に向って東にさがる傾斜地上に位置する。検出した遺構はピットのみである。

(1) 層序

基本的な層序は地表面から耕土(第1層)、床土(第2層)、濁灰褐色砂礫土(第3層)、黄灰褐色土および灰黃褐色土(第4層)である。このうち、第3層は地山と同質であることから、整地層であることがわかる。

(2) 遺構

ピット

長径35cm、短径30cm、深さ35cmを測る。北に傾斜を持つピットである。遺物は、土師器、瓦器が出土している。(中辻)

(3) 出土遺物

遺物はピット、第5層、第4層、第3層から出土している。

ピット(挿図6)

土師器3点、瓦器4点が出士している。土師器には小皿、瓦器には楕がある。

小皿(1)　口径7.0cm、残存器高1.1cmをはかる。底部は欠失している。口縁部は直線的に外反する。口縁端部は丸くおさまる。調整は内面がなで、他は磨滅のため不明である。色調は灰褐色。

楕(2)　口径12.2cm、残存器高2.6cmをはかる。底部は欠失している。全体に浅く、扁平な楕である。口縁端部は丸くおさまる。調整は口縁部内外面、体部内面が横なで、体部外面は未

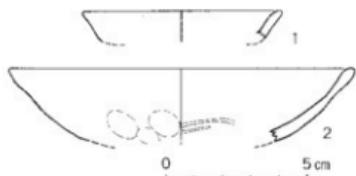
調整。体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。体部内面には暗文が認められる。色調は灰色。

第5層

サスカイトの剝片が1点出土している。

第4層

弥生土器2点、土師器7点、石鐵木製品1点、



挿図6 ピット出土遺物

サヌカイトの剝片8点、サヌカイトの石核1点が出土している。土器類については細片のため器種は不明である。

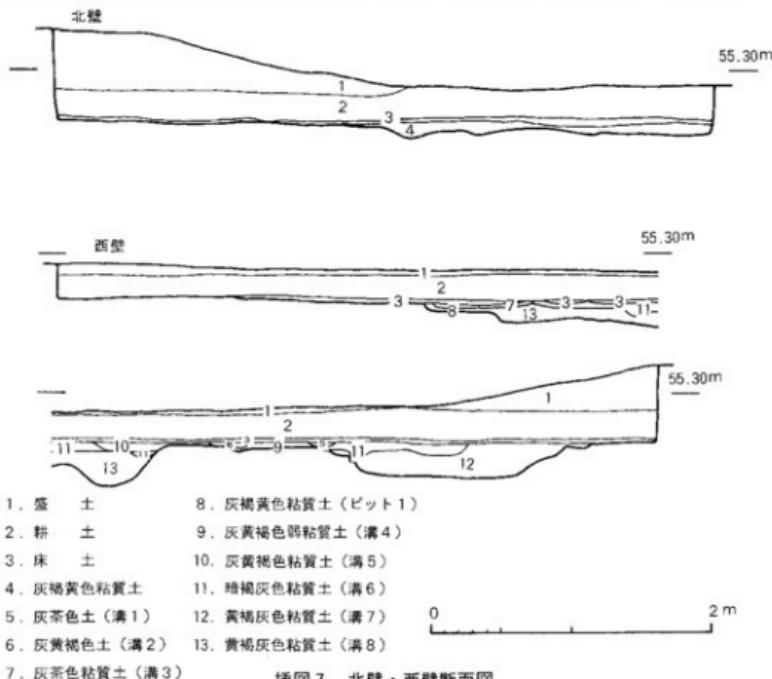
石鎚未製品は長さ47.0mm、幅26.0mm、厚さ12.0mm、重量13.5gをはかる。先端、基端の区別はつかない。両面とも側辺より調整削離を施しているが、一方の面の調整削離はあらく、ステップ状を呈する。比較的丁寧な調整削離を施した面には打ち割り面が混在する。

第3層

土師器22点、瓦器2点、瓦質土器1点、サヌカイトの剝片3点が出土している。土師器には小皿、鉢、銅釜がみとめられる。
(忍)

3. 82-III区

東西約5m、南北約9mの調査区である。検出した遺構は溝8、土壤2、ピットである。なお、遺構の検出面は、上下関係および切り合い関係から3面あり、上面より1~3とした。



(1) 層 序

基本的な層序は、耕土(第1層)、床土(第2層)、灰褐黄色粘質土(第3層)および耕土直上の盛土である。盛土は調査区のほぼ全面にわたって見られ、厚さ10cm以内であるが調査区北端付近では、宅地造成のため、約50cmの厚さで見られる。耕土は、厚さ約20cmで、調査区全面に見られる。床土は、調査区南西隅部においては見られない以外は、全面にわたって2~6cmの厚さで見られる。第3層は調査区の北東隅部を中心に調査区の東半に見られ、約10cmの厚さである。

地山面は、最深部で耕土上面より約35cmを測り、南西から北東に向ってゆるやかに傾斜している。その高低差は約10cmである。

(2) 遺 構

(第1面)

溝 1

調査区の西半の北部において検出した東西方向の溝である。幅約20cm、深さ約4cmを測る。長さ1.4m分を検出した。断面は皿状を呈し、東端と西端ではほとんど高低差は認められない。埋土は灰茶色土で、土師器細片を含む。

溝 2

溝1の南に位置し、溝1と平行にのびる溝である。長さ1.5m分を検出した。幅14~40cmを測り、東に広がっている。深さは約4cmと浅い。断面は皿状を呈し、東端と西端では高低差はほとんど認められない。埋土は灰黄褐色土で、瓦器、陶磁器の他、サヌカイト製不定形刃器1点が出土している。

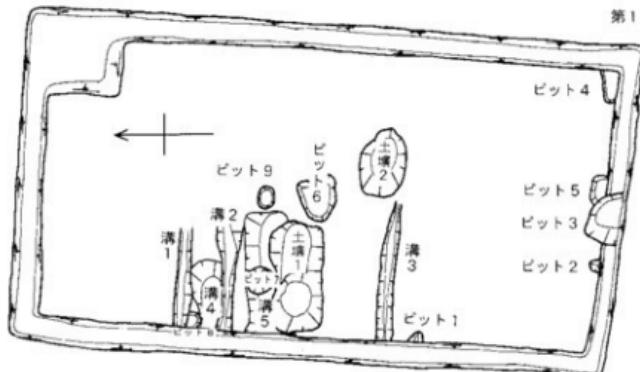
溝 3

調査区の西半ほぼ中央部で検出した溝である。溝1・2と同様に東西方向にのびる。幅約20cm、深さ4cmを測る。長さ1.9m分を検出した。断面は皿状を呈し、西から東に向けて約5cmの高低差をもって傾斜している。埋土は灰茶色粘土で、土師器細片を含む。

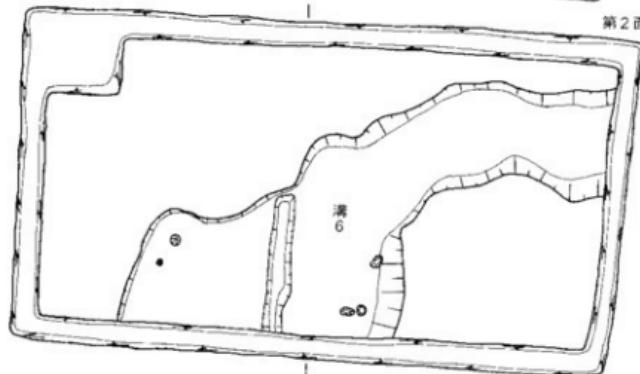
溝 4

溝1と溝2の間に位置し、溝1、溝2と平行にのびる溝状遺構である。幅は、両肩ともそれぞれ溝1・2によって切られているため不明である。長さ約1m分を検出した。深さは、西端部では約4cm、東端部で約13cmを測る。埋土は灰黄褐色弱粘質土で、遺物は出土していない。

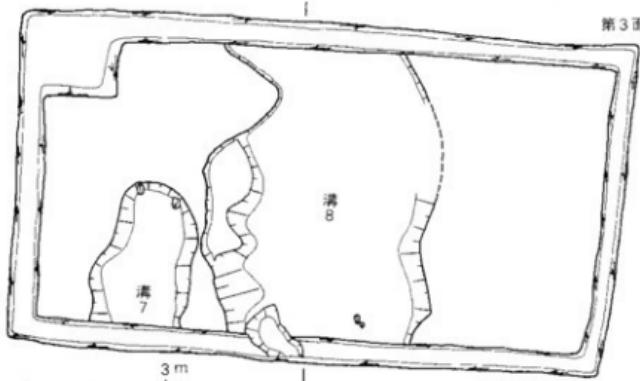
第1面



第2面



第3面



0

3m

插図8 遺構平面図

溝 5

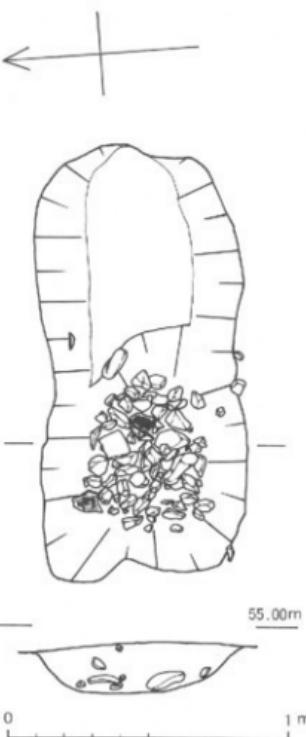
溝2と土壤1との間に位置する溝で、溝4と同様に東西にのびる。長さ1.7m分を検出した。南肩は土壤1によって切られているため不明である。深さは約2~6cmで、西から東にゆるやかに傾斜している。埋土は、灰黄褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。

土壤1

調査区の西半、ほぼ中央部に位置する。長径約140cm、短径約70cmの東西に長い長方形状の土壤である。底部は二段になっており、東半部はテラス状に浅く、深さ約6cmである。一方、西半部は深さ約17cmで一段深く落ち込んでいる。この落ち込みの部分には挙大の大きさの礫が密集して認められ、礫に混じって、平瓦、瓦質土器、瓦器、土師器、須恵器、サヌカイト石核が出土している。

土壤2

調査区のほぼ中央に位置する。長径約100cm、短径約60cmで、東西に長い隋円形を呈する。深さは約30cmと深い。埋土は灰黄褐色粘質土である。出土遺物には、須恵器、弥生土器、サヌカイト剝片、サヌカイト製不定形刃器がある。



挿図9 土壤1平面図・断面図

番号	大きさ(cm)	深さ(cm)	埋 土	遺 物
1	20×14	4	灰褐黄色粘質土	なし
2	15×20	4	濁灰褐黄色粘質土	なし
3	50×75	16	灰 黄 色 粘 質 土	土師器・瓦器・サヌカイト石核・剝片
4	30×45	2	灰黄褐色粘質土	なし
5	25×40	7	暗灰黄褐色粘質土	土 師 器
6	55×65	9	灰褐黄色粘質土	弥 生 土 器
7	40×40	5	褐灰色粘質土	なし
8	20×15	5	灰黄褐色粘質土	なし
9	15×30	5	褐灰色粘質土	なし

表2 ピット一覧表

〈第2面〉

溝6

西から南方に蛇行する溝である。西断面部分での幅は3.9mあり、南断面部分では1.5mと南に細くなっている。また、西断面部分の溝中心付近では、長さ約2.2mにわたって溝状落ち込みがみられる。深さは約6~8cmと浅く、溝状落ち込み部分で約15cmを測る。西断面と南断面付近では約7cmの高低差がみられ、南に低くなっている。埋土は暗褐灰色粘質土である。遺物には、弥生土器、サヌカイト剝片、石鐵がある。

〈第3面〉

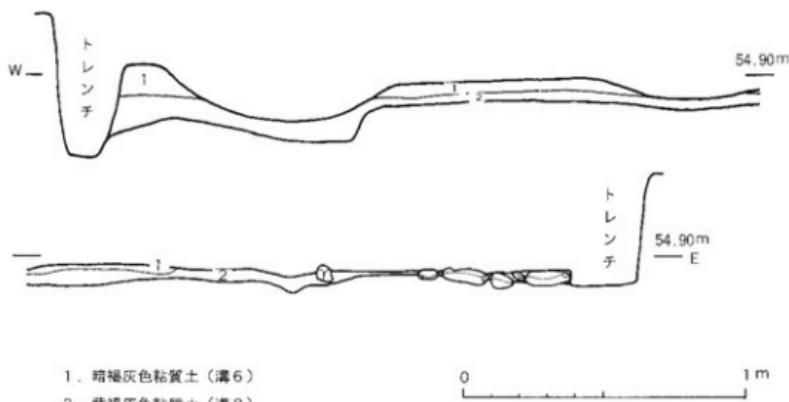
溝7

調査区北西部に位置する溝状遺構である。長さ約2.3m分を検出した。幅約1.3m、深さ約10cmを測る。断面は皿状を呈している。埋土は黄灰褐色粘質土で、弥生土器を含む。

溝8

調査区中央を東西にのびる溝である。幅約2.6~3.3m、深さ約7~17cmを測る。西端部と東端部では約7cmの高低差が認められ、東に低くなっている。西断面付近で落ち込みが認められ、北肩中央付近ではテラス状の部分が認められる。埋土は黄褐灰色粘質土で、弥生土器、扁平片刀石斧が出土している。

(岡本・中辻)



挿図10 溝6・溝8断面図

(3) 出土遺物

容器類には弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器が、石製品には石鐵、石錐、不定形石器、扁平片刃石斧などがある。この他、サヌカイトの剝片と石核もある。土製品としては瓦がある。これらの他に銅管が出土している。

以下、遺構毎に概観する。

なお、石器の観察にあたり、便宜的に実測図の左側をA面、右側をB面とする。法量については現存値である。

溝1

土師器が出土している。細片のため器種は不明。

溝2

瓦器、陶磁器、不定形石器が出土している。

不定形石器（挿図11-17） 長さ4.9cm、幅3.9cm、厚さ1.1cm、重量16.5gをはかる。サヌカイト製の不定形石器で、A面は主要剝離面。右側辺に打点がある。B面右側辺には自然面が残存。A面の両側辺下半部には片面加工によって刃部がつくられている。

溝3

土師器が出土している。細片のため器種は不明。

溝4

土師器、瓦器、サヌカイト剝片が出土している。

溝6

弥生上器15点、石鐵8点、石錐1点、サヌカイトの剝片3点、石核1点が出土している。弥生土器には脚部片が1点、底部が2点ある。弥生上器の中には胎土が生駒西麓産のものが2点ある。

脚部（挿図10-1） 据部径8.0cm、残存器高4.2cmをはかる。中空の柱状部からなだらかに広がる脚部。脚台端部は面をもつ。内外面とも剝離のため調整不明。柱状部には相対する方向に2孔1組の円孔が穿たれている。内外面ともに煤がべっとり付着している。胎土は生駒西麓産。色調は暗褐色を呈す。

石鐵（挿図11-1～8） すべてサヌカイト製の打製石器である。

(1) 平基無茎式の石鐵。長さ26.0mm、幅11.0mm、厚さ4.0mm、重量1.3gをはかる。先端部は欠失している。比較的小型の石鐵である。両面ともに側辺より調整剝離を施す。A面の調整

剝離がほぼ揃っているのに比べて、B面は不揃い。

A面中央には鏽が通る。全体に風化が著しい。

(2) 円基無茎式の石鐵。長さ37.5mm、幅13.0mm、厚さ6.5mm、重量3.0gをはかる。先端部は欠失している。A面は周辺より、B面は右側辺下半部を除いて両側辺より調整剝離を施す。両面とも基部中央に大きく大剝離面が残存。A面先端部中央には鏽が通る。

(3) 凸基有茎式の石鐵。長さ44.5mm、幅13.5

mm、厚さ6.0mm、重量3.0gをはかる。先端部は欠

失している。細身。茎が最も厚く、先端部に向って薄くなる。逆刺はなだらかで、抉りは不明確。両面とも両側辺より調整剝離を施す。A面右側辺中央、左側辺、B面右側辺中央、左側辺下半はステップ状を呈する。全体に風化が著しい。

(4) 凸基有茎式の石鐵。長さ45.0mm、幅15.0mm、厚さ5.0mm、重量2.85gをはかる。先端部は欠失している。細身。基部が最も厚く、先端部に向って薄くなる。茎は端部に至って薄くなる。A面でみれば、逆刺は右側が角ばり、左側がなだらかである。抉りは不明確。両面とも両側辺より調整剝離を施す。A面左側辺の調整剝離はほぼ揃っているが、右側辺は不揃いである。石材の質が悪く、不純物が混っている。

(5) 尖基無茎式の石鐵。長さ43.0mm、幅15.5mm、厚さ0.5mm、重量2.1gをはかる。先端部はわずかに欠失している。幅広で薄い。逆刺は鋭く、基部側辺は直線的である。両面とも両側辺より調整剝離を施す。A面中央はステップ状を呈す。

(6) 凸基有茎式の石鐵。長さ46.5mm、幅20.0mm、厚さ6.0mm、重量5.1gをはかる。先端部は欠失している。幅広。逆刺は両側ともなだらかで、抉りは不明確。両面とも両側辺より調整剝離を施すが、B面中央に大剝離面が残る。A面右側辺の一部、B面左側辺上半の一部はステップ状を呈する。

(7) 尖基有茎式の石鐵。長さ58.5mm、幅12.0mm、厚さ6.0mm、重量3.8gをはかる。先端部、基部はわずかに欠失している。大型で細身。厚みがあり、基部で最大厚をはかる。両面ともに剝離は中央部までのびる。鏽は両面とともに明瞭で、B面先端部で右側に偏るのを除いて、他は中央を通る。両側辺ともエッジは鋭い。

(8) 凸基有茎式の石鐵。長さ39.5mm、幅16.5mm、厚さ5.5mm、重量4.35gをはかる。先端部と基部は欠失している。細身。逆刺は両側ともなだらかで、抉りは不明確。両面とも両側辺より調整剝離を施すが、中央までおよばず、中央に大剝離面が残る。

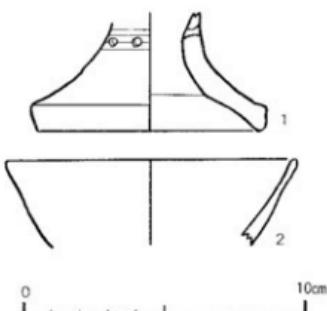
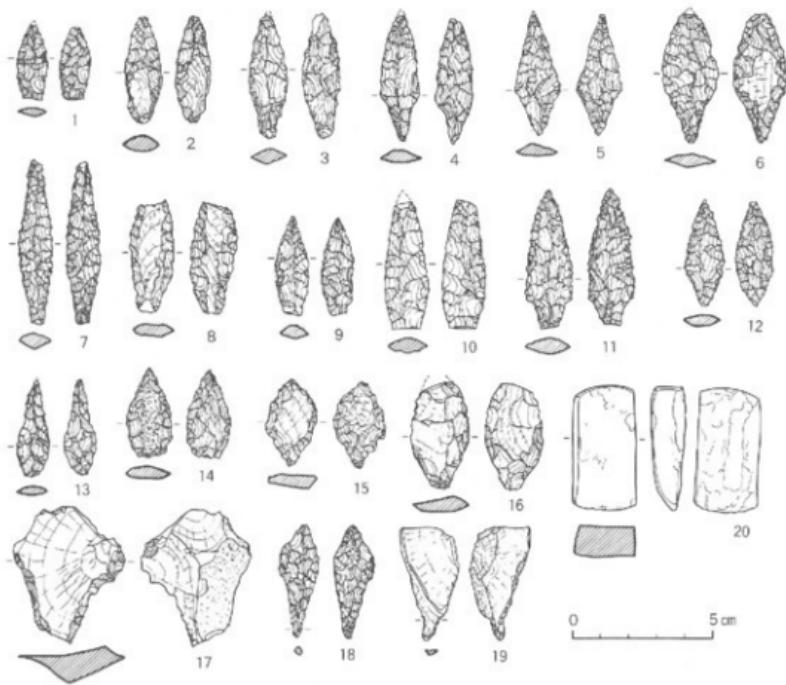


図11 溝6、土壤1出土遺物



挿図12 溝2、溝6、溝7、溝8、土壌1、包含層出土遺物

石錐（挿図11～18） 縦長の頭部下端がそのまま錐部になる石錐。長さ40.0mm、幅14.5mm、厚さ9.0mm、錐長20.0mm、錐径2.5mm、重量3.9gをはかる。周辺から丁寧に調整剝離を施す。先端はわずかに丸味をもつ。

溝7

弥生土器5点、石錐3点、扁平片刃石斧1点が出土している。弥生土器は細片のため器種は不明。弥生土器のうち1点は船土が生駒西藪産である。

石錐（挿図11～9～11） すべてサヌカイト製の打製石錐である。

[9] 基部と側辺中央部が欠失している。おそらく尖基無茎式の石錐。長さ35.0mm、幅12.0mm、厚さ5.0mm、重量2.05gをはかる。中央に最大厚をもつ。両面とも両側辺より調整剝離を施す。

[10] 先端部と基部は欠失している。長さ46.0mm、幅15.5mm、厚さ5.5mm、重量3.85gをはか

る。両面ともに両側辺より調整剝離を施す。B面右側辺中央はステップ状を呈する。

(11) 凸基有茎式の石鎌。長さ49.0mm、幅17.0mm、厚さ6.5mm、重量5.05gをはかる。大型。逆刺は角ばる。全体に側辺から調整剝離が施されている。大剝離面は留めない。周辺からは細かい調整剝離が施され、側辺は鋸歯状を呈する。

扁平片刃石斧（挿図11-20） 片理に平行に刃縁がつくりられている。長さ44.5mm、幅23.0mm、厚さ11.5mm、重量26.1gをはかる。平面はほぼ長方形。B面は破損面。頭部、側辺は研磨面。刃部はB面が破損のため不明。

溝 8

弥生土器4点、石鎌2点が出土している。弥生土器は細片のため器種は不明。弥生土器のうち2点は胎土が牛胸西麓産である。

石鎌（挿図11-12、13） 2点ともサスカイト製の打製石器である。

(12) 尖基無茎式の石鎌。長さ37.5mm、幅14.0mm、厚さ5.0mm、重量2.3gをはかる。先端部は欠失している。逆刺はわずかに角ばり、基部側辺は直線的である。両面とも両側辺より調整剝離を施す。B面中央には小さく大剝離面が残る。

(13) 凹基無茎式の石鎌。長さ33.5mm、幅12.0mm、厚さ4.5mm、重量1.45gをはかる。先端部はわずかに欠失している。細身。基部にやや厚味がある。両面とも周辺より調整剝離を施す。B面中央に小さく大剝離面が残る。

土壤 1

弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、石錐、サスカイトの石核、瓦が出土している。土師器には杯、須恵器には蓋杯、甕、瓦質土器には甕がある。瓦は2点あるが、うち1点は丸瓦で、玉縁が付いている。

杯（挿図10-2） 口径10.3cm、残存器高3.1cmをはかる。口縁部は外傾して大きく開く。調整は内外面とも磨滅のため不明。

石錐（挿図11-19） 不定形の大きな頭部下端に小さな先細りの錐部をもつ石錐。長さ41.5mm、幅19.0mm、厚さ7.5mm、錐長7.5mm、錐径4.5mm、重量5.55gをはかる。横長剥片から作られた石錐で、A面右側辺に打面がある。打面は平坦。A面は主要剝離面である。B面頭部下半左側辺から錐部にかけて自然面が残る。

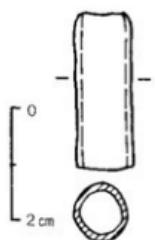
土壤 2

弥生土器、須恵器、サスカイトの剝片が出土している。

ピット 3

土師器、瓦器、サスカイトの剝片と石核が出土している。

ピット 5



挿図13 銅管

厚さ5.0mm、重量3.0gをはかる。両面とも両側辺から調整剝離を施すが、中央までおよばない。A面中央には大きく自然面が残る。

銅管（挿図12）長さ2.8cm、直口1.1cm、重量3.4gをはかる。一端が内擣している。

第2層

弥生土器、上師器、須恵器、瓦器、磁器、石鐵、サスカイトの剥片が出土している。弥生土器の中には生駒西麓の胎土のものが含まれている。

石鐵（挿図11-15）尖基無茎式の石鐵。長さ31.0mm、幅19.0mm、厚さ5.5mm、重量2.8gをはかる。幅広。周辺より調整剝離を施すが、両面とも中央までおよばない。A面中央には大きく大剝離面が残る。

表採

上師器、須恵器、石鐵、サスカイトの剥片が出土している。

石鐵（挿図11-16）凸基有茎式の石鐵。長さ37.5mm、幅21.0mm、厚さ6.0mm、重量5.7gをはかる。先端部は欠失している。大型で幅広。逆刺は両側ともなだらかで、抉りは不明確。両面とも両側辺より調整剝離を施すが、調整はあらい。B面中央には大きく大剝離面が残る。

（忍）

IV ま と め

今回の調査地は比較的小規模なものであったが、従来考えられている中野遺跡の北限および北東限にあたり、遺跡の範囲を把握する上で貴重な手がかりを提供してくれるのではないかという大きな期待があった。

調査の結果、II区においてはピット1個のみを検出するにとどまったものの、ピット内からは上師器小皿片と瓦器腕片が出土しており、遺構が中世の建物に伴うものであることが推測できる。II区は標高約51mの右川に向ってゆるやかに傾斜する段丘の東端にあたり、低位における遺構のあり方を再認識させるものとなった。II区の東方約250mには東高野街道があり、街道

沿いには旧中野村の集落が広がっている。過去の大坂府教育委員会の調査では、中野村集落の北側で中世の遺構が確認されており、従来の範囲より北に同時期の遺構が存在する可能性が充分考えられる。

また、III区の調査では、弥生時代中期の溝を検出した。溝内からは石器が比較的多く出土し、この調査区においても北への遺構の広がりを想定させる結果となった。

中野遺跡は行政区画上、富田林市中野町1丁目、同2丁目、中野町西1丁目、若松町4丁目同5丁目、若松町西2丁目、同3丁目に位置する。その範囲はおよそ800m四方と考えられている。遺跡を東西に2分するように国道170号線が南北に走っている。特に、中野遺跡における弥生集落のおおまかな範囲は、国道170号線より東に広がると推定され、北は現在の推定範囲よりもひろがると考えられる。東については石川に向う河岸段丘東端までと考えられる。これは、1979年と1982年に段丘東端における調査の結果から言えることである。

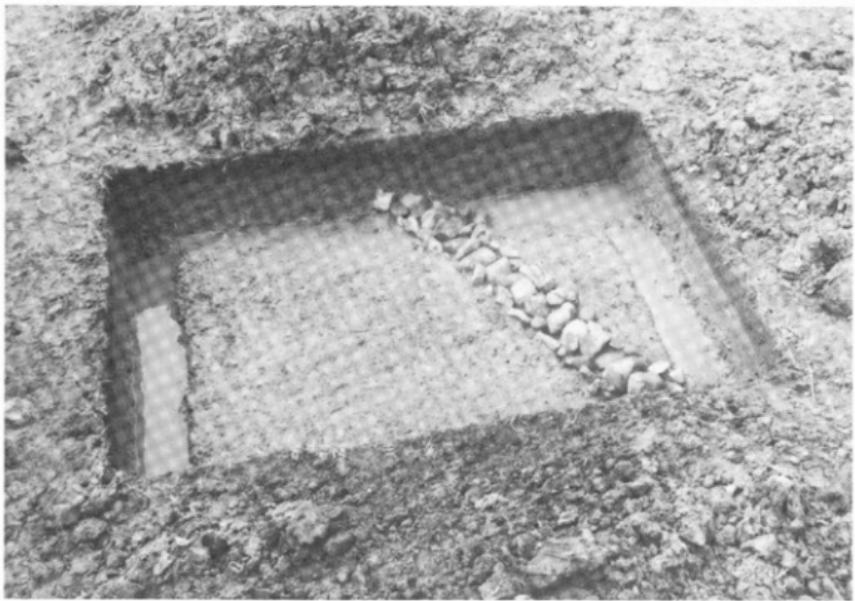
中野遺跡における発掘調査件数は、20ヶ所をこえると言え、まだまだ遺跡の全容を明らかにしたとはいいがたい。今後の計画として、中野遺跡の中心を東西に走る市道が予定されており、これに伴う大規模な発掘調査で、更に遺跡の性格が解明されることを期待したい。

(中辻)

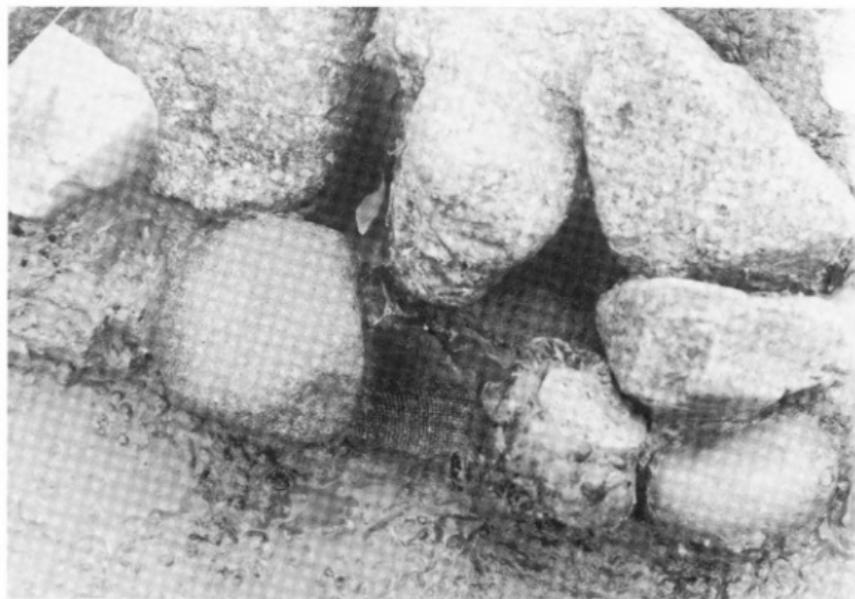
図 版



調査区近景 南より



遺構全景 東より



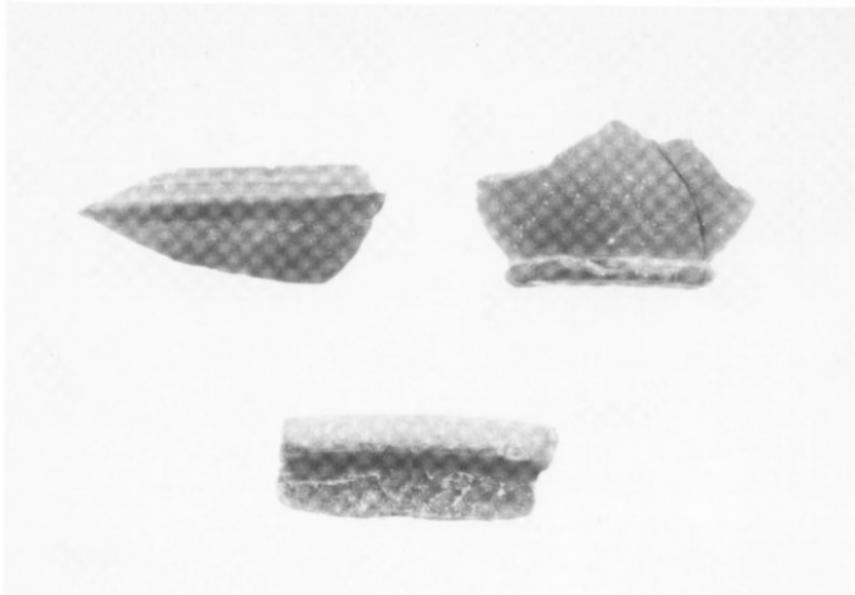
暗渠瓦出土状況 北西より



同上 東より



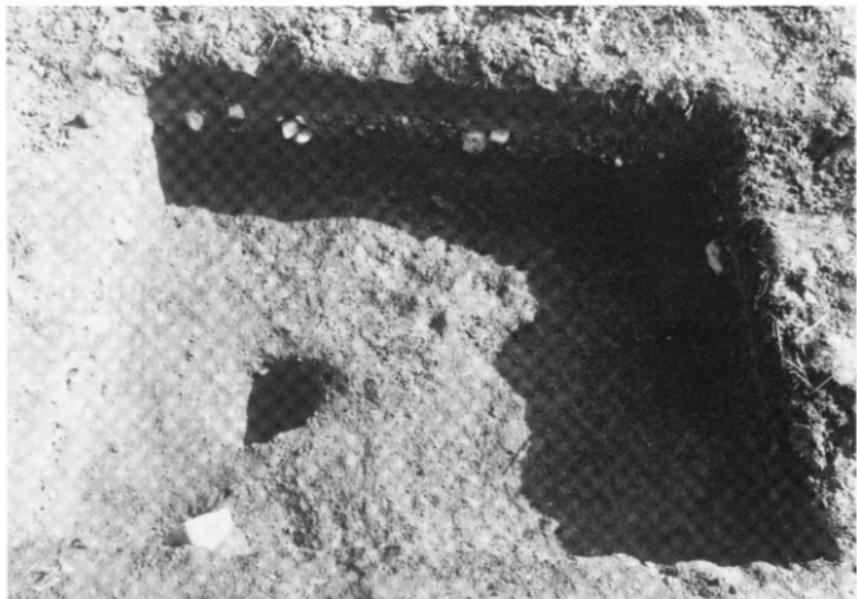
暗渠細部 北東より



第4層出土遺物



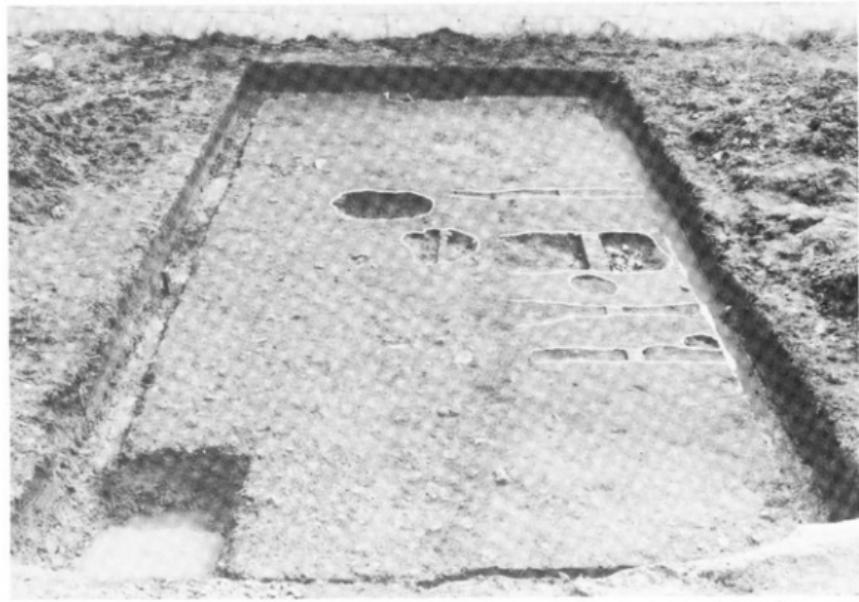
調査区近景 南西より



遺構全景 西より



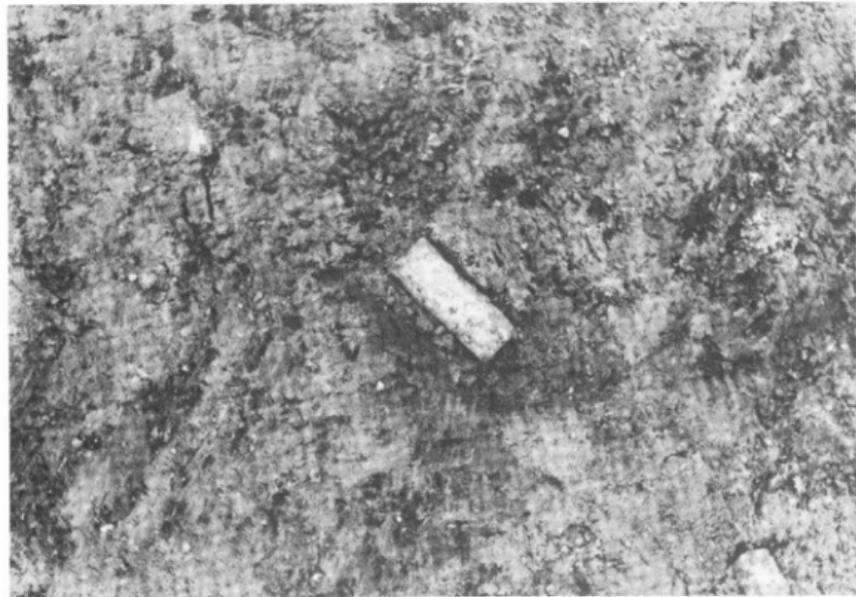
調査区近景 西より



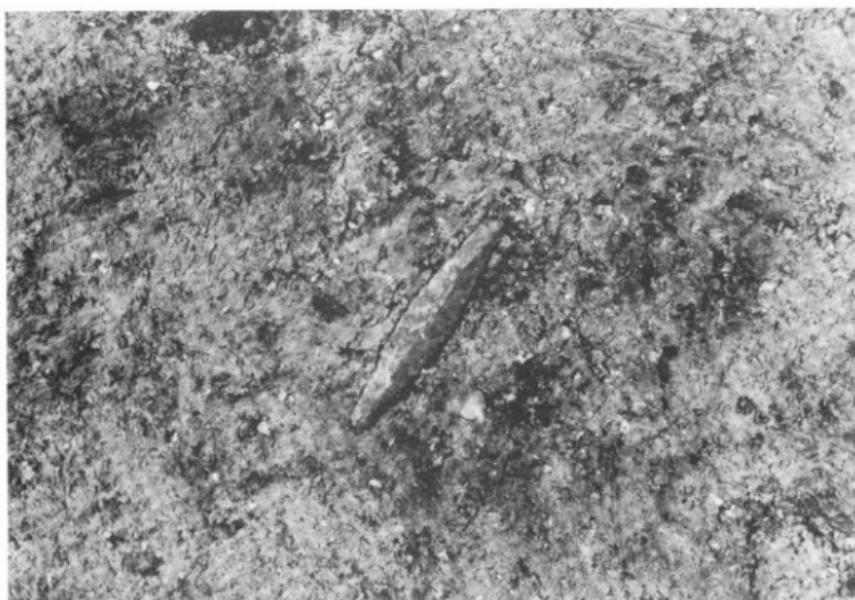
遺構全景(第1面) 北より



土塙1 遺物出土状況 北より



第3層銅管出土状況 西より



溝6上面石鐵出土状況 南より



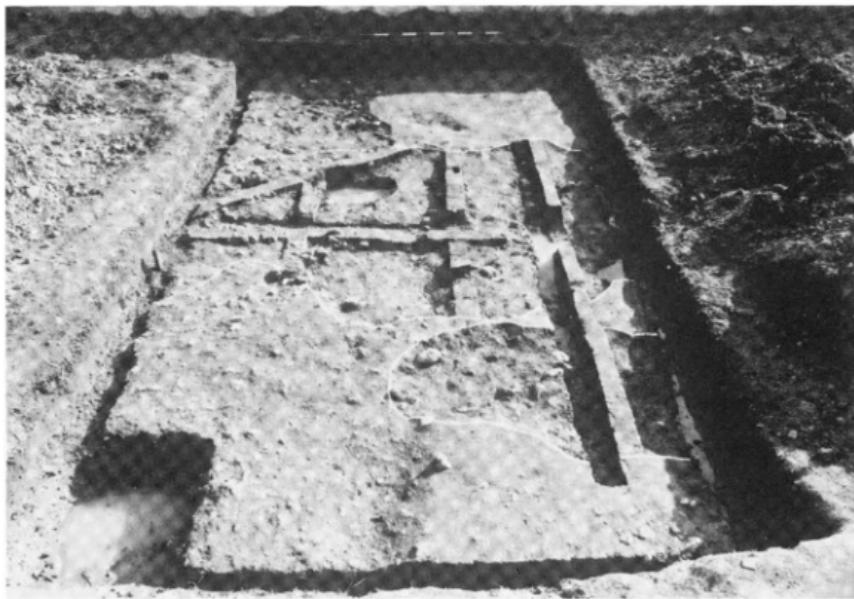
溝8上面石鐵出土状況 西より



遺構全景(第2面) 北より



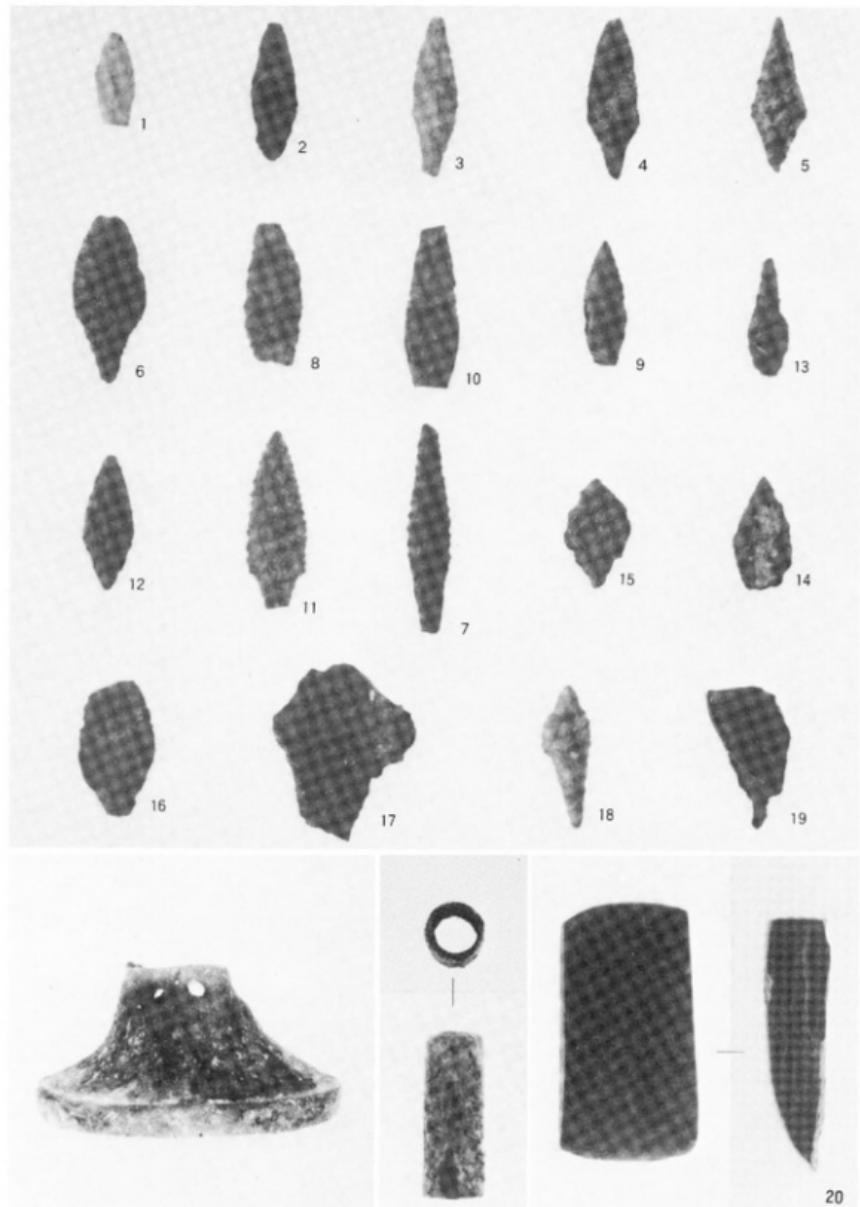
溝6遺物出土状況 南より



遺構全景(第3面) 北より



溝7 石斧出土状況 西より



石器(石鐵・石錐・不定形石器・扁平片刃石斧)・銅管・弥生土器

富田林市埋蔵文化財調査報告 8

発行年月日 1983年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 汐の宮綜合印刷

